震災体験とその後の復興への想い

水戸

益子一彦
MASUKO Kazuhiko
(S58 卒)
三上建築設計事務所

2001 年 9 月 11 日 8：46 にニューヨークでの同時多発テロの発生からちょうど10年が経ったその日は、奇しくも 2011 年 3 月 11 日 14：46 に始まったあの地震から半年を過ぎた日だった。偶然にもふたつの事変には似たような数字が並ぶ。偶然にも符合した人為と天意の災いは、共に私たちが生きる現代という基盤の脆さと私たちの時代精神の危うさを顕在化させるものだった。

近代建築の終焉の時期に誕生したツインタワーは、近代の建築技術に永遠の生命を与えられたかのようにマンハッタンの先端に建っていた。大量のエネルギー消費と引き換えに 30 年余りを実在してきた超高層ビルは、航空機の衝突によって瞬く間に瓦礫と化した。エネルギー消費と引き換えに移動時間を驚異的に短縮した近代の技術の結晶が、武器として使われた。常道を逸した物質がアナクロに成り掛けていた物質を破壊した。２０世紀の始まりに近代のエピローグを感じた。

経済が安全と道徳に優先する資本主義を盲信する、大衆迎合化する成熟した民主主義の主権者である私たちは、生産能力と判断能力を著しく衰退させ、資本主義の規約のみを根拠に生命維持も安全の担保も見ず知らずの他者に頼りきり、責任のない権利の行使を自由と錯覚していた。しかし、疑いようのない民主主義と資本主義は、確実に劣化の方向に向かっている。グランドゼロにも新しいビルが建設され、9・11 は歴史になろうとしている。

3 月 11 日、無防備な安全に慣れ切った私たちの脚下を揺さぶる地震が起った。東北から関東にかけて押し寄せた津波は平和な大地を一瞬にして飲み込み、多くの街が瓦礫と化した。日本人ならば誰もが地震を体験し、日本が地震国であることは知っているはずであった。地震に対する備えもしておくべきことであった。けれども、地震や津波に対する防備も誰かがしてくれると漠然と期待していた。

水戸も震度6強を体験した。水道も電気も都市ガスも通信も止まった。いつ復旧するのか皆目見当もつかなかった。スーパーやコンビニの棚から商品がなくなり、電話も途絶えた。辛うじて携帯メールだけが繋がった。交換するものを失えば持ち合わせた金銭は役には立たないものとなり、携帯電話はただの荷物となった。深夜に人工の灯りを失った街は真っ暗だった。不気味な暗さと静けさは生まれて初めて遭遇する事態だった。ただ満天の夜空だけが美しかった。涙がでるほど美しかった。
多くの人たちの努力によって水戸の市街地のインフラは翌日には復旧した。そして、テレビからは「想定外」という言葉が溢れてきた。「想定外」という言葉は、想定する想像力を持ち得なかったこと、あるいは想定を避けたことを意味する。過去にも同じような現象が起っていたにも関わらずそのリアリティを欠いていたと自戒した。

私は責任を持って安全な建築を創ってきた。と思っていた。いくつもの得意先の安全調査を進めていくうちに、「何故壊れたか」という理由が明らかになっていった。調査した大多数の建物は、当然のことながら建設当時の法令に適合し、JIS 基準に適合した材料を用いて、建設省官房営繕部監修共通仕様書通りの施工がなされていた。しかし、現実は多くの建物が損傷を被った。設計・建設の当時、建築基準法は規定される通り最低限の基準であることにまで及ばず、仕様に不備があるとは疑いもしなかった。責任をもっていたと思いながら、国家という曖昧な誰かが規定したものを鵜呑みにしてきたことに気付いた。自分自身の生命さえも見ず知らずの他者に委ねることに慣れてしまい、自らの道徳や責任を棚上げにしてきたのだ。

あれから半年を数えた翌日、中秋の名月は暑さのなかで節電に明け暮れた夏の終わりを告げていた。未だ爪痕が残る 3・11 の記憶も次第に薄れかけている。喉元過ぎれば熱さも忘れる。惨劇の威力をもってしても、自己責任を唱えながら補助に頼り、道徳や責任を置き去りにして未来を見定めない私たちには、特効薬はおろか処方箋にもならなかった。

福島での惨劇も忘れて煌々と明かりを灯し、私たちはまた元通り見ず知らずの誰かの絆に頼りながら、安穏とした生活を営んでいる。高々と上った月は何物にも遮られることなく、真ん丸に風雅を漂わせて、私たちを見下ろしていた。

仮設環境改善の提案

前見文徳
MAEMI Fuminori
(H10 卒)
前見建築計画

基 真由美
MOTOI Mayumi
(H12 卒)
M.A.D

仮設住宅改善支援
ソラノキャンパスプロジェクト

前見文徳（H10卒）+基真由美（H12卒）+西寿雄（H13卒）+鈴木宏亮（H14卒）

冒頭、宮城県東松島市は私の故里です。東日本大震災で命・記録・風景を失いました。5 月以降の仮設入居まで、安否確認、家族支援に暮れ、戻れば仮設建設状況、過去の震災仮設入居者アンケートや改善案データ集収、向かえば故里はもとより隣接する石巻市、塩竈市や女川町などの被災状況の視察、隣接県の動向把握に明け暮れ、今もその渦中です。焼け野原ともいえる凄惨な被害状況の中、家族もなんとか入居、6 月初旬再び私も仮設に向かいました。閑散とした声のない風景の連続、室内のうだるような暑さと結露。9 月、台風 15 号が直撃した折にも結露は増し、冬支度もままならない状況で秋を迎えています。以下その中で「私たちにできること」として試行錯誤した震災支援のひとつをご紹介します。

現行のプレファブ仮設は、本体そのもののグレードが上がらない限り今後も住みにくいままです。自立を促進させる意味で住みにくいくらい簡素なつくりが望ましいという一部の議論がありますが、住みにくいものが住宅といえるか？その「質の問題」を岩手県遠野市や高田市、福島県では真摯に受け止め、木造仮設やコミュニティ形成を促す配置などの工夫を導入しています。対して、既に建設された鉄骨プレファブに対する知恵は？ひとつの解決方法として微力ながら「ソラノキャンパス」というオーニングシステムを推進、問題提起しています。

6 月、直接に仮設本体に影響を与えず、せめて夏季の熱環境をコントロールできる方法と実施が必要ではないかと現状把握を行なうものの、広大な建